

人と自然の共生とはどういうことか

河合雅雄（兵庫県立人と自然の博物館 名誉館長）

高度な文明社会の急激な進展により、大規模な自然破壊が進行しつつある。かつては公害と言われて局所的であったが、今やその規模は地球レベルに達し、地球環境問題として一括される恐るべき自然破壊の状況に立ち至るに及んだ。そのことに対応する処方箋として、「共生」がとりあげられ、「自然と人の共生」というキャッチフレーズが大々的に唱えられている。そのこと自体はよいことだと思うが、共生という語の内容が曖昧でかつ安易に使われているのが気になる。この言葉の意味することを考えてみたい。



共生とは、元来生物学の用語である。簡単に要約すると、異種間の個体の密接な関係ということで、相利共生と片利共生に大別される。このテーマの例については、非常に多くの類書があるからここでは省略するが、共生の定義からすれば、「人と自然の共生」という文言は拡張解釈だということである。自然とは何かという問題はさておき、ここでいう自然の中には大気や水、土などの無機的自然も含まれている。人と自然の共生とはどういうことなのかを、原義を頭におきながら考えてみたい。

人間と自然の関係

人と自然の関係では、人間と自然はどのような関係にあるのか考えてみたい。ヒトがサル類から進化して地球上に誕生したのは、約600万年前である。場所はアフリカ。そのときの生活様式は、狩猟採集生活であった。アウストラロピテクス属やホモ属など多様な種が生成・消滅・新生を繰り返しながら進化していったが、生活様式は基本的には狩猟採集生活であった。彼らは石や木、骨などの自然物で道具を作った。総称して石器時代と言われる。

この時代の人間の生態系の中での生態的地位を考えてみるとどうなるか。食物連鎖の中での地位は、雑食性の肉食獣という所であろう。人口が非常に多ければ、捕食者としての影響はかなりのものだったろうが、おそらく人口は少なかったと思われる。推定のしようもないが、狩猟採集民であった縄文前期の人口が、全国で10万5千人余とされていることから考えると、猿人や原人の人口は少なく、したがって彼らの捕食圧はとりあげるほどではなかったであろう。つまり人類は、雑食性の肉食獣の生態的地位にある生態系の一員だったと言える。共生という次元では、自然と相利共生の関係であった。

1万1千年前の頃、生業革命が起こった。農耕牧畜の開花である。つまり、自然に強く依存していた生活から、自然を改変し利用するという新しい次元の生活様式を獲得したのである。それはエルトンピラミッドからの離脱であり、反自然的動物という新種の出現でもあった。農耕牧畜という新しい生業は非常な勢いで地球上に広がり、今や狩猟採集民族は絶滅危惧種的存在になってしまった。共生という関係においては、人間は自然から一方的に利益を得、自然に対しては何もおかえしも与えない、つまり、人間と自然は片利共生の関係にあるとってよい。ただし、人間は一方的な自然の破壊者、搾取者であったわけではない。新しい生態系の創出という行為も行ってきた。例えば、水田や溜池や里山の造成は、水生動物や陸生動物に、自然にはない新しい生態系を創出したとってよい。

しかし、20世紀の後半になって事情は一変した。急激な高度な工業化により大地も大気も水系も汚染され、農薬の使用、農地改革、河川工事、大規模な森林伐採等によって生態系は破壊

され、人間は自然に対する搾取者として振るまうようになった。つまり、人間と自然は片利片害関係になったのである。いわば自然に対して害虫的存在になりかけているのだ。

文明という武器を手に入れた人間は、反自然的な存在である。そして、人間は自然から一方的に恵みを受けている片利共生者である。この事実を素直に受け入れ、自然に対する謙虚な気持、敬愛の心を失わず、せめて寄生虫的存在にならぬよう努力すべきではないだろうか。そして、かつての多様な水生生物が賑った水田や生物多様性に富んだ里山を復元し、新しい生態系を創出する工夫をしていくべきではないか。

文化的共生

人間は文化を創造し文化的世界を創出することによって、反自然的存在となった^{註)}。とによって、そのことによって人間はたんなる自然破壊者になったのではない。文化は諸刃の剣である。反自然的存在であることは、一面自然にはないすぐれた側面を内包するということでもある。つまり、創造力と想像力を自由という培地で展開した文化的世界である。この世界の中で、人間と自然の新たな共生関係を創出することが可能である。それは相利共生とか片利共生といった生物的次元を超越した“文化的共生”ともいべき共生空間である。

早春を彩って、カタクリの花が咲いている。ギフチョウにとっては大切な密源である。アリにとっては種子についているエライオゾームを恵んでくれる花である。ギフチョウとアリにとっては、カタクリの花はそれ以外の何ものでもない。一方、カタクリから見れば、それぞれが送粉者と種子散布者であるにすぎない。しかし、カタクリと昆虫は、かけがえのない相利共生の関係をつくっているわけで、カタクリはこうした昆虫がいなければ種のいのちを存続させることができないのである。それは進化的運命共同体とでも言えようか。

人間はどうか。一輪のカタクリの花を見ても、多様な感想を抱くだろう。

ある人は、美しいと思い、ある人は可憐、ある人は寒風にさらされた姿を凜然と感じるだろう。同じ美しいという感動にも、ある人はあでやかと見、ある人は逆に素朴な美しさを感じるだろう。このように人様々な感動は、人とカタクリの相互作用によって、美の世界が創出されたと見ることができる。また、人は寒空に毅然と咲く姿に崇高さや神秘的な感動を受ける。山や岩石、大木など自然界にある事物に神秘性や超自然的な感動をもつとき、その事物を媒介にして自然と人の目に宗教的な世界が立ち現れたことになる。また人は、カタクリがなぜ早春のまだ寒い日に花を咲かせ、木々が芽吹くと枯れて消失するのはなぜかと疑問を持つ。あるいはアリがなぜ種子を食べないで運び去るのか、どこへ持っていくのかといった疑問を抱くだろう。そのとき科学の世界への通路が開かれたのである。

生花は人と自然の文化的共生空間を、見事に顕現した一つの典型と言ってよい。大地に転がっている石と枯枝。そこに生えている野菊と薄。それらの一つ一つを見ればどうということはない。しかし、人間が作った陶器の壺にそれらを集めて活ければ、その物自体からはかけ離れた見事な造形物が顕現する。それは人と自然物の相互作用によって創造された文化的共生空間なのである。日本庭園は、文化的共生空間として代表的なものであろう。徹底的に人為的にアレンジした庭に、借景という手つかずの自然を配することにより、芸術と宗教の混然一体となった空間を演出したものだ。

このような例をあげれば、いくらでもつきないであろう。要は人間と自然の共生とは、文化的共生という生物的次元を超えたところで可能なのである。そして、それを構成する生物種や岩石などの特性を生かすことによって成り立っている。生かすということは、人間が意味づけ価値づけるといことである。それは文化的所産である以上、民族により社会や時代によって変容していくが、自然を損なわず人間の心を豊かにする世界の創出に他ならない。

註) ここで言う文化は文化人類学による概念で、社会によって共有され伝承される生活様式および価値概念をさす。河合 著『森林がサルを生んだー原罪の自然史』参照。